

建築家

と

小説家

近代文学の住まい

若山
滋

彰国社

目次

プロローグ	建築からの文学史	文学からの建築史	8
辰野金吾と夏目漱石の時代			
第一章	開化の時勢		13
	コンドル来日	東洋風の西洋	14
	浮遊する二階	『浮雲』	21
	建築家になろうとした作家	夏目漱石	29
第二章	煉瓦と下宿		39
	赤煉瓦の街	辰野金吾	40
	鈴木禎次という建築家	『三四郎』	43
	近代への不安	『こころ』	52
	文学を生んだ下宿	『蒲団』	61
後藤慶二と谷崎潤一郎の時代			
第三章	モダンと田園		71
	アール・ヌーヴォーとゼツェッシオン	後藤、堀口、村野	72
	田園の発見	『武蔵野』	82
	肉体の延長	谷崎潤一郎	89
第四章	個室と密室		103
	密室のまなざし	『屋根裏の散歩者』	104
	フランク・ロイド・ライト	帝国ホテル	110
	取り残された場所	『濯東綺譚』	117

第五章 起ち上がる美と滅びゆく美

バウハウスとル・コルビュジエ 前川、坂倉、谷口 128
 白色のモダニズム 『風立ちぬ』 138
 滅びゆく空間の少女 『伊豆の踊子』『雪国』『古都』 142

第六章 戦火の下で

ブルーノ・タウトと坂口安吾 『日本文化私観』 158
 二つの関西 『細雪』と『夫婦善哉』 164
 小林秀雄の建築論 『蘇我馬子の墓』 179

第七章 日章の名残

戦争と平和のコンペティション 丹下健三の登場 188

醜悪を含む優美 『金閣寺』『午後の曳航』 197

三島由紀夫という建築 その自邸 203
 人間を囲うもの 『砂の女』 213

第八章 成長という破壊

見ること見られること 『箱男』 226
 メタボリズムとポストモダン 篠原一男と磯崎新 230
 意識の共同体 『風の歌を聴け』 238

エピローグ 『サラダ記念日』 近代日本という神話 252
 あとがき 259

自分は、どの程度に日本人なのだろう。時々、考える。

DNAとしては先祖代々日本人のだが、父の仕事の関係で台湾に生まれ、圧倒的なアメリカ文化の影響下で育ち、地中海に萌芽し西欧で発展した科学技術を学び、モダニズムの建築を仕事として、ヨーロッパにも、アメリカにも、アジアにも、アフリカにもよく出かけた。そして外に出れば出るほど、日本について考えさせられた。そしていつのまにか、建築をつうじて日本文化を論じることが仕事の一部となった。

しかしその日本文化というものも常に変化する。

平成に入っただけに長く、昭和は遠くなりつつあるが、この時点で振り返ってみて筆者は、明治維新から昭和天皇の崩御までが、何か「一続きの時代」であったように思えるのだ。

その「時代の物語」を書いてみようと考えた。

大陸の影響を受けながらも独自の文化を培ってきた、ユーラシアの東の果てにへばりついたような列島が、新大陸アメリカからやってきた黒い船の艦載砲によって太平の眠りを覚まされ、すったもんだのあげく、世界文明のメインストリームに同調することを選択し、驚異的な学習と挑戦によって、アジアで唯一の先進国となり、軍事大国として拡大し破綻し、再び驚異的な復興と成長を遂げ、経済大国として拡大し破綻しようとする(?)までの、「明治・大正・昭和」という驚くべき一続きの時代の物語である。自分もまた、その大きな流れの一滴であったのだ。

筆者はこの物語の主人公に、「建築家」と「小説家」という、一見奇妙なセットを選択した。

それはいずれも近代の産物であり、いずれも構築する存在である。

それまでも棟梁とか大工とか呼ばれる技術者はいたし、歌人や俳人や戯作者もいたが、建築家と小説家はヨーロッパからやってきた新しい概念であった。そして一方は物質による物理的空間の構築を行い、もう一方は言語による意識的空間の構築を行った。またそれは、それまでの日本文化がきわめて非構築的なものであったことを考えれば、過去の文化空間の破壊でもあったのだ。

しかしその現れ方には逆の方向性も見られる。建築家は伝統を受け継ぎながらも、や

はり新しい空間を築こうとし、小説家は新しい表現を求めながらも、慣れ親しんだ景観が失われるのを惜しんだ。筆者は常々、視覚を支配する「建築の出現性」と、過去の経験に基づく「言語の廻行性」について考えている。

この選択には、経緯がある。

長いあいだ「文学の中の建築」を研究してきた。『万葉集』から村上春樹まで、最近では海外文学にまで及んで、何冊か本を出している。「家」と「やど」―建築からの文化論』（朝日新聞社）、『漱石まちをゆく―建築家になろうとした作家』（彰国社）など。前者は、万葉の時代から西鶴の時代まで、文学と建築の相互関係を追ったもので、後者は、夏目漱石の、作品の中の建築と実際に体験した建築を論じたものだ。本書は、相互関係の歴史という点で前者の、近代文学という点で後者の続編に当たる。あわせて読んでいただければこれに越したことはない。

文学の中の建築記述研究をもとにしているため、その引用文が随所に配されているが、いずれも名文であり、それもまた本書の血肉である。文章を味わうとともに、そこに「立ち現れる空間」を味わっていただきたい。

建築家と小説家を同時進行的に追うことによって見えてくるものは、「建築からの文学史」であり、また「文学からの建築史」である。これまで別々のものとして語られてきた

物語に橋を架け、新しい視野を開きたい。

しかしそれだけではないだろう。近代日本人の文化空間の構築と破壊という、この時代この国に特有の物語が姿を現すような気もするのだ。そしてそのことによって、自分と日本と世界との関係も見えてくるのではないか。

建築家と小説家は、何を構築し、何を破壊したのか。

〔注〕 章立ては時代を追っている。第一、二章は明治期、第三、四章は大正期、第五、六章は昭和前期、第七、八章は昭和後期であるが、厳密なものではない。また作品も、作家（建築家、小説家）を重視しているため、取り上げる順が前後する場合がある。

本文において、引用文に登場する「私」を、小説家を指す言葉として使う場合が多いので、若山を指す言葉として「筆者」を使う。引用文に、現代では不適切とされる用語が含まれるが、文学性を損なわないようそのままにする。

本書は、これまでに読み、考えてきた多くのものが積み重なっているので、あえて参考文献は記さない。引用は、夏目漱石に関しては岩波書店「漱石文学作品集」、その他は、特記なき限り、「新潮文庫」によっている。近代建築史に関して、筆者は村松貞次郎、藤森照信の師弟に知己があり、その著作が参考になっている。

第一章 開化の時勢

辰野金吾と夏目漱石の時代

社会建築文学年表 明治・大正・昭和

年号	社会	建築	文学
1868 (明元) 1870 (明3)	明治維新 1868	築地ホテル館 1868	
		富岡製糸場 1871	
		銀座煉瓦街 1873	
1880 (明13)	西南戦争 1877	開智学校 1876 コンドル来日 1877	
		博物館 1881	小説神髓、当世書生気質 1885
		鹿鳴館 1883	浮雲、第一編 1887
1890 (明23)	大日本帝国憲法1889 議会開設 1890	ニコライ堂 1891	第二編 1889 舞姫 1890 五重塔 1891
		日清戦争 1894	たけくらべ 1895
		三菱一号館 1894 日本銀行本店、岩崎久彌邸洋館 1896	武蔵野 1898 不如帰 1899
1900 (明33)	日露戦争 1904		吾輩は猫である 1905
			蒲団 1907 三四郎 1908
1910 (明43) 1912 (大元)	韓国併合 1910	両国国技館 1909 赤坂離宮 1910	田舎教師、フランス物語 1909 白樺派、一握の砂、家 1910 雁、刺青、少年 1911
		東京駅 1914 豊多摩監獄 1915	こころ 1914

建築は竣工年、文学は発表年を表す。設計、執筆、完成、刊行はずれる場合がある。

コンドル来日 東洋風の西洋

維新から十年目の一月末。

横浜港へと向かう大きな船のデッキの上、身なりのいい長身の青年が、青い眼を大きく見開き、近づく山並を凝視していた。やや緊張した表情の頬を風が撫でる。

見てきたように書いたが、この物語の最初の主人公はイギリス人だ。

ジョサイア・コンドル（一八五二—一九二〇）、弱冠二五歳。ロンドンで生まれ、サウスケンジントン美術学校とロンドン大学で建築を学び、一流建築家への登竜門といわれるソーン賞を受賞したエリートで、この国に本格的な西洋建築をもたらそうとしていた。はるか西の島国からの長旅である。彼の胸は新天地への期待と不安でいっぱいであったろう。コンドルは結局、この東の島国で妻をめとり、骨を埋めることになる。

この年、列島を揺るがす大事件が起きている。

倒幕戦争最大の英雄であったはずの西郷隆盛が、反政府軍を率いて決起したのだ。熊本の田原坂で激戦となり、大敗を喫した西郷は、逃げ帰った故郷の城山に雨あられと弾

を撃ち込まれ、無念の最期を遂げた。

現代の報道写真に匹敵する錦絵を見ると、田原坂の戦闘は、くっきりと二つのグループに分かれて描かれている。一方は洋風の帽子に制服、手には銃をもち、もう一方は鉢巻に袴、手には刀をもつ。つまりこの戦争は、軍隊とサムライの、物質と精神の、文明と文化の戦争だったのである。前者は勝ち、後者は敗れた。しかし西郷は、政府にとっての賊とはなっても、国民にとっての悪となったわけではない。むしろ維新の志士たちの中で、坂本龍馬とともに最も慕われる英雄となった。ここに、近代日本スタートの矛盾が象徴されている。

つまり維新から十年目の、コンドル来日と西郷の敗北は、建築と軍事における西洋追随という点で同側の事象だったので。

コンドルは、それまでの器用な「お雇い外国人」という立場を超える、本格的な洋風建築の教育者として政府に招かれた。しかし彼には日本文化への強い好奇心があり、また創造的な設計者としての自負もあった。工部大学校（まもなく帝国大学工科大学となる）の教授となって何人かの弟子を育てたあと、大学を辞し建築家として活動する。博物館（帝室博物館）、鹿鳴館の設計を手がけ、ロシアで基本設計が行われたニコライ堂の実施設計

も担当し、その後は主として三菱の岩崎家や宮家の邸宅などを設計している。舞踊家前波クメ子と結婚し、浮世絵師河鍋暁斎かわなべきょうさいについて絵を学び暁英という名を授かるほどになっている。日本文化に深く傾倒して、つまり日本人になったといっている。

これはもちろんコンドルという人物の特質であるが、底流として当時の英国知識人にそういった東洋趣味が存在したと見るべきであろう。

一方、日本政府における都市や建築の西洋化を進める勢力の中心は、外務卿の井上馨であった。幕末には長州藩の熱烈な攘夷主義者であったが、維新以後は「西洋かぶれ」と呼ばれるほどの欧化主義に転じた。三井をはじめとする財界との癒着も指摘されているが、官よりも民に信をおく合理主義者であった。ウォートルス設計の銀座煉瓦街にも、コンドルの招聘にも関わり、鹿鳴館は井上がつくつたとさえいわれている。

井上らの主たる政治目標は条約改正であった。そのために国家の威信を整えようというのだから、彼らが望んだものは堂々たるクラシック様式か、華麗なバロック様式かであったろう。しかしコンドルの設計は、博物館にしても鹿鳴館にしても、ややイスラム風インド風であり、ニコライ堂はもちろんロシア風であった。すなわち東方の風である。そこに、西洋を熱望していた日本政府の要人たちとの「ズレ」があった。

このズレに関しては、ヨーロッパにおける歴史的な文化構造に触れなくてはならない。



鹿鳴館(上)とニコライ堂(下)

ヨーロッパ建築の歴史は、ギリシア神殿を基本とする古典主義様式と、ロマネスクからゴシックへと変化したキリスト教様式の相互関係で成り立っている。それはヨーロッパの知が、「ギリシア思想」と「キリスト教」の混成であることに符合する。また絵画や音楽や文学など、建築以外の文化にも、「古典主義」対「ロマン主義」というかたちで、この関係が反映されている。

古典主義は、ルネサンス期、一七世紀、一八世紀の末から一九世紀と、それぞれ隆盛を見たが、それはヨーロッパ諸国が、合理主義的な文明思想によって成長、発展を遂げた時期と重なっている。つまりこの時代の古典主義は、植民地主義と資本主義による西欧文明の世界拡張を背景としていた。これに対するロマン主義は、合理に対する情念、文明に対する文化をモチベーションとして、古くはキリスト教を、新しくはヒューマニズムをバックに、古典主義と対峙した。つまり古典主義には、合理主義と進歩思想と国家権力が、ロマン主義には、キリスト教と中世追慕と反権力が隠れていると考えていい。

コンドルが育ったヴィクトリア女王の治世は、デイズレーリとグラッドストーンが議会政治をリードした大英帝国の絶頂期であった。しかし一方、ロンドンの空気は煤煙に汚染され、貧困な労働者が街にあふれ、繁栄が生み出す矛盾も小さくはなかった。やがてドイツとアメリカに追い上げられ、この世界帝国もピークを過ぎようとする。そんな

時代の英国知識人には、古典主義的な合理思想に対する反発と、ロマン主義的な東洋趣味への志向があった。その動きが、世紀末に向けて、アール・ヌーヴォーという潮流につながっていくのだ。青年建築家ジョサイア・コンドルは、そういった文化環境の中、西の、まさに繁栄の頂点にある島国から、東の、まだ海のものとも山のものとも知れない島国へとやってきたのである。彼のインド、イスラムを含む東洋風への傾倒にはそういった背景がある。

こうしたコンドルのデザイン傾向は、井上をはじめとする政府の面々の意にそぐうものではなく、彼らは、帝都に堂々たる官庁街をつくるという一大プロジェクトを企画し、コンドルに見切りをつけるかのように、ドイツからヘルマン・エンデとヴィルヘルム・ベックマンの事務所を招来する。盛期を過ぎようとするイギリスより、新しく統一された帝国の発展期にあるドイツの方が、日本の国情に近かったのだ。日本国の中枢を、すべて洋風建築で構成するというこの計画は、さまざまな反対にあって簡単には実現しなかったが、その遺産が今も残る司法省（法務省旧本館）の建築である。

現在、コンドルの設計をよく体験できるのは、重要文化財となっている旧岩崎久彌邸であろう。

外観はまったくの西洋風であるが、内部にはコンドルらしくイスラム風の部屋もある。主要な部屋の壁に「金革紙きんかかし」が使われていることに注目したい。もとは「金唐革きんからかわ」といって、革に金箔を貼って型で模様を浮き出させたもので、ルネサンス期にポッティチェリが初めて使ったという説もある。オランダをつうじて江戸時代の日本にもたらされたが、田中優子は『江戸の想像力』の中で、平賀源内がこの金唐革の偽物を紙でつくって一般化させたことを書いている。

デザイン的には西洋風の植物模様であるが、日本でいえば唐草模様であり、これはギリシア、ペルシアから、中国、日本へと、ユーラシアの東西を駆け抜けた歴史的なデザインである。つまり、コンドルが岩崎邸の壁面内装に使用した金革紙は、単なる西洋風ではなく、奈良時代シルクロードの唐草模様と、江戸時代オランダ渡りの金唐革とその偽物の、技法とデザインが流入しているのである。設計者コンドルは、この金革紙をつくる職人たちの腕におどろいたであろう。

必ずしも権力の庇護を受け栄光の人生を送ったわけではないが、日本に本格的な西洋建築をもたらしたし、一生をこの島国に捧げたコンドルが、心ある人の敬愛を受けないはずはない。東京大学の構内には、北海道大学のクラーク博士と同様、コンドルの銅像が立ちつづけている。左手をポケット、右手に葉巻、というところがいい。台座は伊東忠太のデザインであるが、これも面白い。

様式史的には評価されないところもあるようだが、筆者はコンドルのロマンにあふれた作品と人生に好感をもっている。

今の建築家は多く、ル・コルビュジエの子供であるが、もとはといえば、このコンドルの孫なのだ。

浮遊する二階 『浮雲』

明治二〇年、神田駿河台でコンドルがニコライ堂の工事を見まわっているころ、二葉亭四迷（一八六四―一九〇九）という奇妙な名の青年によって、近代文学の幕が切って落とされた。

言文一致小説の嚆矢こうし『浮雲』である。

静岡から出てきた主人公の内海文三が、東京の小川町にある叔父の家にやっかいになり、娘お勢に恋心を抱く話であるが、この家が、物語の舞台として重要な意味をもつ。

文三は、この家の二階「六畳の小座敷」を間借りする。一階には、階段を降りたところに「お勢の部屋」があり、玄関に近いところに母親のお政のいる「奥座敷」がある。「梯子はしこ段」と呼ばれる階段が、お勢の一階と文三の二階を結ぶ道具となっている。このころの階段は、ほぼ一間いっけんのあいだにつくるのが普通、つまりきわめて急勾配で、上り下りには手も使った。梯子段というにふさわしい。

文三がお勢の部屋に入る場面では、「障子」が二人の心理的葛藤を表現する小道具である。

「ためらいながら二階を降りて、ふいと縁を回って見れば、部屋にとばかり思っていたお勢が入り口に柱にもたれて、空を向上みあげて物思い顔……はッと思って、文三立ち止まった。お勢も何心なく振り返ってみて、急に顔を曇らせる……ツと部屋へ入はいってあとびツしやり。障子は柱と額はにか合わせをして、二、三寸跳ね返った。

跳ね返った障子を文三は恨めしそうにみつめていたが、やがて思い切りわるく二歩三步。わななく手頭てさを引き手へかけて、胸と共に障子をおどらしながらあけてみれば、お勢は机の前にかしこまって、一心に壁とにらめくら。」(岩波文庫)

障子という日本建築独特の隔てが、一つの家に同居する男女の微妙な心理を演出する。勢いよく閉めると跳ね返って少し開いてしまうのは、年配の方なら誰にも経験があるだろう。この文章のユーモラスな感覚は、江戸期の戯作文学のなごりと、障子という道具の「軽さ」からくる。「梯子段」と「障子」が、男女の関係を隔てたりつないだりする道具となるのは、この時代の木造住宅の構造をよく表している。

文三は、勤め先である役所の俗物的な課長とうまくいかず、職を失う。母親のお政は急によそよそしい態度をとるようになり、お政のいる「奥座敷」は、もともと文三にとつてやや気後れのする空間であったが、失職してからはなおさら縁遠いものとなる。一方、同じ職場に勤めている文三の友人昇は、万事に抜け目がなく、出世コースにある。ときおりこの家にやってくる。文三の友人として二階に上がるのだが、しだいにお政やお勢とともに一階にいたことが多くなる。お政は、文三に代わって昇に娘を嫁がせようと考え、初めのうちは嫌っていたお勢までも、昇になびくのだ。文三の住む二階は、空に浮いた雲のように、一階すなわち俗世間と切り離されて漂いはじめた。

この救いのないリアリズムが、小説というものであった。

ここで、昇は文明開化に乗る者であり、文三は取り残される者である。登場人物の名

がキャラクターを表しているように思える。昇は「上昇」志向、お政は「政治」的、お勢は「時勢」に流され、文三の精神はそういった世間から切り離された「文学三昧」を意味するのではないか。もともと二葉亭四迷という名前は、父親に「くたばってしまえ」といわれたことからつけられたというから、小説の登場人物にもそういう名前を当てたとは十分考えられる。

官制改革の行われた明治一九年の東京を舞台としている。西南戦争以後、日本人は「文明開化」「西洋化」という風潮に逆らえなくなっていた。開化に乗る者は勝者であり、取り残される者は敗者であった。この家の一階はその時勢の変化を表現し、二階は変化に取り残された浮き雲のような孤独を象徴している。

伊藤博文や井上馨をはじめ、政府の要人たちが鹿鳴館で踊っているところのことだ。

二葉亭は、江戸の市ヶ谷で生まれたが、五歳のときに名古屋に移り、鳥根県の松江で暮らしたあと上京、四谷の伯父（祖父の養子で血縁はない）の家に下宿した。自伝的小説『平凡』によれば、このときに『浮雲』に似た経験をしているようだ。東京外国語学校の露語科に入学し、二二歳のとき坪内逍遙を訪ねたことが文学者への道を開いた。

しかしこの人物には、文士というより壮士の気質が濃く、『浮雲』を執筆したあとロシ

